

出会い

看護福祉学部
看護学科

助教 明野 聖子



北海道内に4年制看護系大学が3校という時代、私は本学看護学科に入学しました。短大という選択肢もありましたが、一度に看護師・保健師という二つの受験資格が得られることや何よりも学生生活を長く楽しみたい!という不純な動機から、私の学生時代は始まりました。当時はクラスメイトに道外出身者も多く、1年生のスキー授業では、ゲレンデに現れたキツネを珍しがり(私にとっては飼犬の餌を狙う身近な存在でした。)、アメ玉をやる東京出身の友人の姿は育った土地の違いを感じさせる光景



富良野での宿泊スキー授業。ホテル隣のニングルテラスにて。(後列左が私)

でした。そんな道内外各地出身の友人たちと出会い、温泉旅行やスキー場巡りと楽しい時間を過ごしました。飲み会やサークル活動に熱を注ぎ過ぎ?!友人が鳴らす玄関のチャイム音が目覚ましになったことも何度かありました。苦楽を共にした友人たちは、今でもかけがえない存在となっています。

さて、看護学生にはつきものの実習と国家試験。2~3年生の実習では、ユニフォームを着て、ステートを身につけ、病院に行くことに嬉しさを感じたのも束の間、記録や勉強に追われ、看護師さんに突っ込まれませんように1と祈る日々でした。術後安静が必要な整形外科の患者さんが自力歩行を繰り返し、「なぜだろう」とベッドサイドに足を運びました。自分のできなさに対峙し、いっそのこと熱が出て休んでしまいたいと思ったこともありました。「健康は生きる目的ではなく生活の資源です」という先生の言葉にハッとしました。患



成人看護学実習。学生控入室にて。(後列右が私)



卒業旅行先のハワイにて。ディナークルーズ。(中央が私)

者さんと住民の方、指導者さん、先生方との出会いを通して、人を知り、自分を知り、看護を学ぶ、どれも大変貴重な体験でした。国家試験を控え4年生も最終に入ると、朝から晩まで図書館で友人たちと勉強に励みました。試験が終わると、結果はいざ知らず、ハワイへと卒業旅行に飛び立ちました。現実を離れ、南国の地で過ごす時間は何と解放感に満ちていたことでしょう!

学生時代のいくつもの出会いが今日の私を築いています。今もその同じ学び舎で、いくつもの出会いが私を成長させてくれていると思っています。

私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は明野助教と玉重准教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

私の学生時代

心理科学部
言語聴覚療法学科

准教授 玉重 詠子



私は子どものころから何かと“とろとろ”として遅かった。兄がつけたあだ名はトロリー・バスだった。闘争心も探究心もなく、家庭での勉強をひとつもせずに(もちろん塾の経験もなく)、夕方のテレビドラマの再放送を毎日欠かさず見て、夜8時には就寝する生活をしていました。高校は“近くで入れるところに入る”という家庭の方針で、とくに受験勉強もせずに地域の公立高校に入学した。高校でも家庭勉強をせずに(やはり塾にも行かず)夜8時に就寝する生活をしていました。大学も“近くで入れるところに入る”という方針だったが、気付くと「あら?入れるところがないわ。」という状況だった。そこでやむなく予備校へ行った。予備校での

“大学に入るための勉強”は、とても参考になった。

1年間の浪人生活を経て、やっと北海道教育大学に入ることができた。専攻が特殊教育(現在の特別支援教育)だったので、1年生から療育機関の見学などがあった。3、4年生では附属小学校の特殊学級(現在の特別支援学級)での教育実習があった。教育実習では男子トイレの小さいあさがおの中に小さい“うんち”を発見し、「だれのかしら?」と考えたこともあった。また、特殊学級の先生から誘われるままに校内宿泊学習や特殊学級の合同キャンプに行った。校内宿泊学習の夜は、納骨堂付近での“きもだめじ”があった。私は暗い道端に隠れ、生徒がきたら「わっ!」と驚かせるお化け役だった。小学校3年生の女子生徒(ダウン症候群児)の前に「わっ!」と飛び出たところ、その生徒がとっさに「だ、だれなの、いったい?」とテレビドラマの科白のようなことばを発



療育機関の行事(炊事遠足)に参加しているところ。(左端が私)

した。実際場面での言語能力の高さにひどく感動した。夜は教室で複雑な寝相をする生徒たちと一緒に寝た。夜中に気配を感じて眼を開けたすぐその前に生徒の寝顔があった時は、さすがに「おお!」と驚いた。

このような無為に過ごした学生時代を振り返り、今こうして人並みに暮らせているのはその時々に出会った方々が親切にしてくれたおかげと感じる。今出会っている方々、これから出会うであろう方々にお返しできればと思う。